NB
NANIWA

青い終局・笹沢左保・ナニワブックス

大衆と共に生き
大衆と共に伸び行く
ナニワ・ブックス NANIWA-Books

青い終局

昭和38年7月20日発行　　¥ 280

著者　笹沢左保
発行者　今井二三雄

発行所　東京都千代田区神田神保町1の53　株式会社 浪速書房
振替東京12840

落丁乱丁は本社にてお取替致します。

い

終

局

目次

悪に走る　五
女は魔もの　三三
中年男　六三
桃色構想　九〇
今日子という女　一一八
敵はそこにいた　一四七
恐怖の陰謀　一七五
青い終局　二〇四
草狩夏彦の敗北　二三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

〝乾いた女〟のあらすじ

協和興信社第二調査部員草狩夏彦は、風間アケ美なる女性をプレイボーイの面子にかけても必ずものにすると誓い、混血児のヘンリー織田と対立していた。……

都会議員で観光事業会の大ボス十時勘三郎の次男勇二は、結婚慰しや料迄払つて、結婚した妻サクラと夫婦の契を結ぶ事が出来ない。実は、勘三郎の経営するホテルニユー東京のフロント嬢でプレイガールと言われる霧谷水江に想いを寄せているからだと、サクラから聞かされた。草狩夏彦は、霧谷水江に会つたがたちまち意気投合、勇二夫妻が新婚旅行から帰つた夜、ホテルニユー東京の一室で抱き合つた。それを忍び見た勇二は、それが彼を妻のもとに帰すための演技とも知らず失跡する。二日後責任を感じた夏彦は、渋谷神泉町のアパートに霧谷水江を訪ねようと電話するが、途中で切断、駆けつけた時には、すでに彼女は何者かに連れ去られたあとだつた。隣室の女の話だと、犯人の一人は小柄な混血児風な男だつたと言う。夏彦は咄嗟にヘンリー織田の顔を想い浮かべた。ヘンリー織田は夏彦にとつて、風間アケ美なる女性をめぐつて争つてきた宿命のライバルである。

悪に走る

1

ヘンリー織田の存在を、またも意識しなければならない――と、瞬間、草狩夏彦は呆然となった。

ヘンリー織田を、宿敵と考えたことはある。宿敵つまり対立しなければならない宿命の絆に操られている者同士は、その決着をつける日まで、絶えずどこかに接点を置いているものだろうか。

十時勇二とサクラ、それに霧谷水江の世界に、ヘンリー織田が入り込んで来る余地はないと思っていた。しかし、考えようによっては、何でも屋であるヘンリー織田がどこに現われて何をしようと、別に不思議がることもないわけだった。

霧谷水江が誰かに誘拐されたということのみが、厳然たる事実なのである。織田がそれに関連してどのような役目を果たしたかは、あくまで枝葉の問題だった。

「その混血児みたいな男がここへ来たのは、今夜が初めてだつたんですね？」
草狩夏彦は、改めて白いナイト・ガウンの女を正視した。
「そうですね。あんまり見かけない顔でしたけど……」
女は形式的にガウンの襟をかき合わせた。沼のように不健康な翳を感じさせる女であつた。三十前後というところだろう。美人ではないが、女が発散するもののうちに薄暗いベッドの上でのたうち回る娘の裸形を連想させるような、性的な妖気があつた。
「その混血児の声は聞きませんでしたか？」
草狩夏彦は、女の粘りつくような、わざとらしい視線をはずして言つた。
「さあ……」
女は、笑うべき時でもないのに、口許を綻ばせた。
この騒ぎとは別に、女は何かを言いたいのだ——と、草狩夏彦は、直感した。彼に親しい口をきける機会を、待つているのかも知れなかつた。
「すると、男たちは互いの名前を口にしようともしなかつたですね？」
「無言でしたわ。終始一貫して……」
「水江さんは救いを求めようとはしなかつたんですか？」

「わたくし、後ろ姿を見ただけでよくは分かりませんでしたけど……。霧谷さんはすつかり諦めてしまつているような態度で、男たちに抱きかかえられていました」
「そうですか……」
これ以上の手掛かりは、どうも得られないようである。草狩夏彦は、天井へ目を向けて短い間思索した。今夜これから、水江の行方を追うというのは不可能である。消息の糸は切れている。どつちの方向へ行つたらいいのか、その見当さえつかないのだ。
しかし、もしこの事件にヘンリー織田が一枚嚙んでいるのだとしたら、そう慌てる必要はなかつた。今夜遅くにでも織田を尋ねて行つて、ことの仔細を聞かしてもらえばいい。織田も相手が草狩夏彦なら、下手な隠し立てはしないだろう。
と考えて、草狩夏彦は落ち着きをとり戻した。彼はふと、煙草をくわえる気になれたのである。
「あなたは、霧谷さんのお友達ですの？」
ドアに寄りかかるようにして、女は草狩夏彦を見上げた。
「ええ、まあそんなものです」
草狩夏彦は、柔らか味のない視線を女に据えた。

「しかし、こうしているのも一つには仕事の責任というものがあるからです」
「お仕事？」
「そうです」
「興信所のお仕事ですか？」
「そうです。よく分かりましたね」
と、草狩夏彦の目が動かなくなった。やはりこの女とは、ただの行きずりですまされそうにない——と、彼の胸裡にある種の警戒心が芽生えた。
女は、半ばからかうような眼差しで、身体を緩やかに動かしている。
「わたくし……あなたに、救ってもらいたいんです」
「ほう……。肩でもマッサージしてくれとおっしゃりたいんですか？」
草狩夏彦にしては珍らしく、トゲのある口のきき方をした。水江のことを案ずる気持ちに、この女の厚かましい態度が入り込んで来て、それが腹立たしかったのである。
「もっと、深刻なんですわ」
女は、草狩夏彦の皮肉など感じないといった顔つきだった。
「お部屋へ行って、ゆっくり相談の相手になって頂きたいんですけど、その部屋に当面の敵がい

て……そうすることも出来ないのです」
「当面の敵？」
「ええ」
「穏やかな言葉じゃありませんね」
「でも、敵には違いないんです」
「一体、何者なんです」
「男です」
「それだけでは、ちょっと分かりませんが……」
「四十六歳の男性なんです」
「あなたとの関係は？」
「さあ……」
「言えないんですか？」
「適当な言葉が見つかりませんの」
「ご主人？」
「とも言えますけど……正式な夫婦じゃありませんから……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「それなら、愛人と言うべきでしょう」
「愛人なら、一対一のはずでしょう？」
「そうじゃないんですか？」
「わたくしは、そのつもりです。あの人だけを愛しています。でも、あの人は違うんですわ。何人もの女と同じように関係を結んでいるんです」
「失礼な言い方かも知れませんが、あなたはその人の二号さんということになりはしませんか？」
「いいえ。わたくし、あの人から物質的な報酬など一切受けていません。それどころか、わたくしのほうからあの人に……」
「貢いでいるというわけですか」
「ええ」
「それで、あなたはその男を嫌っていらっしゃる？」
「憎んでさえいます」
「それなら話は簡単だ。別れれば、全ては解決する」
「でも、それが出来ないんです」
「なぜ？」

「あの人を愛しているからです」
「あなたは、ぼくを嘲弄しているんですか」
草狩夏彦は、女を睨みつけた。からかわれている——そうとしか思えなかつたのである。愛人を当面の敵と呼び、憎んでいると言つたかと思うと今度は愛していると言う。まるで気違いみたいに、言葉に統制がない。
「いいえ、わたくし、真剣なんです」
と、女は叱りつけられた子供のように、深々と項垂れた。
「わたくし、渋谷で〝エリーゼ〟というクラブを経営しています。医師だつた夫が五年ほど前に亡くなつて、それ以来わたくしの独力で発展させて来たクラブです。二人の子供がいます。上の子は小学生、下の子は幼稚園へ行つてますわ。経済的には何一つ不自由はありません。でも、代代木の家に婆やと家政婦と四人暮らしの子供たちは、決して幸福ではないと思います。両親のいない家庭……子供たちは黙つていますが、きつと、わたくしのことを恨んでいるでしようね」
「なぜ、家へ帰つてやらないんです」
「わたくしも、母親らしいことをしてやりたいとは思います。わたくしも三十一……こうして、アパートで男が訪れるのを持つているのなんて、自分でも惨めだとつくづく思いますわ」

「だから、家へ帰ればいいじゃないですか」
「それが、できないのです」
「だとしたら、あなたは精神異常者だ」
「かも知れません。愛欲に狂つて、子供のことさえ顧みようともせずに、男にしがみついている三十女……と、軽蔑されても仕方がありません。でも、あの人には女を惹きつける魔力があるんです。その証拠に、何人かの女たちがあの人の言うままにされていながら、それで満足しているんですから……」
「魔力？」
「とも言いたくなるのです。そのくらい強烈で、不思議な雰囲気なのです。女をすつかり骨抜きにしてしまうような……」
「その男の、肉体交渉における巧みな技術を忘れることが出来ないんじゃないですか？」
「それもあるかも知れません。でも、それ以上にあの人の持つ雰囲気が……。わたくし、何度あの人と別れて代々木の家に帰ろうかと思つたか分かりません。それが……どうしても駄目なんです。あの人に声をかけられただけで、腑抜けになつてしまつたように、わたくしの意志は死んでしまうのです。憎みながら……離れられない。ある意味では地獄です。そうですわ、麻薬患者が

麻薬を憎悪しながらそれを捨てきれないのと同じなんです」
「その人は、何を職業としている人なんですか？」
「アズマ観光の重役なんです」
「ちゃんとした会社の、ちゃんとした重役じゃないですか」
「ええ。奥さんも子供さんもいるんです。それでいて、数人の女たちがサービスしたい一心で、あの人の訪れを待つているのです」
「それで、ぼくにどうしろとおつしやるんですか？」
「わたくしを、あの人の魔力から引き離して頂きたいのです」
「しかし、あなたにその意志がない以上、ぼくにはどうしようもないじやないですか」
「あなたは、そういうことが出来る方だと直感しました。麻薬患者だつて、なおるんでしよう？名医にかかれば、わたくしのこの中毒症状も矯正出来るはずです。佐山真一郎というあの麻薬を、あなたがわたくしから追放してくださればいいんですわ」
「佐山真一郎……」
と、草狩夏彦が呟いた時である。
「真佐江……」

女を呼んだらしい男の声が、廊下で聞こえた。
「ああ……」
女は髪の毛を掻きむしるようにして、せつなそうに眉をしかめた。
草狩夏彦はこの時の女の顔のように複雑な表情を、今日まで見たことはなかつた。女の胸のうちに、男の声に応じようとする感情とそれを拒みたい意志との相剋があつたに違いない。目は憎悪するように燃えていたが、女の身体はすでに落ち着きを失つていた。男の魔力に勝てない自分に対する絶望感、そして男の声を聞いただけで躍動を始めた肉体の若々しさ——女は、二人の自分と相対してもがいているのである。
草狩夏彦は、真佐江と呼ばれたその女を睨めていた。彼はそこに、ボロをまとつた天使、大金持ちの娼婦といつた。チグハグな女の姿を見出していた。
「子供さんたちのことを、思い浮かべてごらんなさい」
草狩夏彦は低い声でそう言つてみた。しかし、女にはもう何の反応も表われなかつた。
「失礼しました……」
女は逃げるようにして、廊下へ出て行つた。ひるがえつた女の白いガウンが、草狩夏彦の目に鮮やかに残つた。

《馬鹿馬鹿しい……》

彼は夢から覚めたような面持ちだつた。救つてくれ、事情はこうだ、だがやつぱり離れられない——と、女の勝手な言動にいつの間にか引き込まれていた自分が腹立たしくなつて来る。あるいは、そのような魔力を天性として具えた男がいるかも知れない。だが、そんなことは現在の草狩夏彦とは無関係な事柄である。そんな男から離れようとしない女が愚かなのだ。正式に興信所を通じて依頼されたことではないと思えば、草狩夏彦が女の頼みにそれほど真剣にならず、また責任も感じなかつたのは当然だつた。しかし、女がなぜ草狩夏彦の職業を知つていたか、そして気心も知れない相手にどうして事情を打ち明けて救いを求める気になつたのか——。そこまで考えようとしなかつたのは、明らかに彼の手落ちだつた。

と分かつたのはあとのことで、この時の草狩夏彦は単純に女の言葉だけを受け取つて、腹を立てたのである。

2

草狩夏彦は中野のアパートへ帰つて、十二時近くになつてからヘンリー織田に連絡をとつた。織田の名刺には事務所と自宅、二通りの電話番号が記されてあつた。事務所は呼び出しのベルが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo